

主の召しに応えたマリア

(ルカ1・26～38)

一、御使いがマリアに語った

26節をご覧ください。さて、その六か月目に、御使いガブリエルが神から遣わされて、ガリラヤのナザレという町の一人の処女のところに来た。とあります。語り手は、その六か月目にと語ることにより、ガカリヤ・エリサベツの話と26節以降の物語が関連していることを伝えているようです。その六か月目にとは、御使いガブリエルが神殿の聖所でガカリヤに現れてから、六か月目にという意味です。そういうわけで、御使いガブリエルが神殿に仕える祭司ザカリヤに現れたことと、ナザレのおとめマリアに現れたことは、神の御計画の中で起きたと、そのように語り手が伝えていると読むことができます。

27節をご覧ください。この処女は、ダビデの家系のヨセフという人のいいはずで、名をマリアといった。とあります。マリアは、ヨセフというダビデの家に属し、その血筋であった男性と結婚していました。当時の婚約は、夫婦がまだ一緒に生活していないことを除いて、今日の結婚の契約と同じでした。一方マリアは、どのような血筋だった

のかと言いますと、祭司の家系でした。36節に「見なさい。あなたの親類のエリサベツ、あの人もあの年になって男の子を宿しています。」とあるからです。エリサベツは、1章5節に「彼の妻はアロンの子孫で、名をエリサベツといった。」とありますように、祭司の家系でした。聖書の価値観によれば、家柄はまったく問題にされていませんが、マリアが祭司の家系であったということは、家系がもたらす几帳面さ、思慮深さがあったと思われま。マリアは、福音書によれば、思慮深い女性だったように思います。

御使いはマリアに語りました。28節です。「おめでとく、恵まれた方。主があなたとともにおられます。」と。知性と教養があったマリアには、それが特別なことばであることが、すぐに分かりました。だからこそ、御使いの語ることばにひどく戸惑ったわけです。御使いはマリアに言いました。30節、31節です。「恐れることはありません、マリア。あなたは神から恵みを受けたのです。見なさい。あなたは身こもって、男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい」と。このことばは、どこかと似ています。そうです。1章13節の「御使いは彼に言った。『恐れることはありません、ザカリヤ。あなたの願いが聞き入れられたのです。あなたの妻エリサベツは、あなたに男の子を産みます。そ

の名をヨハネとつけなさい。」と似ています。語り手は、ガカリヤ・エリサベツ夫妻からヨハネが生まれたことと、おとめマリアから主イエスが生まれられたことをセットにして語っていることが分かります。

御使いは、さらにマリアに語りました。32節、33節です。ルカ1・32～33と。御使いは、主イエス・キリストによる御支配のことを語りました。

二、マリアの応答

34節にマリアの応答が書かれています。マリアは御使いに言った。「どうしてそのようなことが起るのでしょう。私は男の人を知りませんのに。」と。昔から人々は、子供ができる仕組みは分かっていたとしても、男性と女性が終われることによって女性が身こもることを、はつきり知っていませんでした。

御使いは語りました。35節、36節、37節です。ルカ1・35～37と。聖霊によって身こもる、すなわち神御自身によって身こもる、と言われてもです。マリアは、ヨセフと婚約という、今日で言う結婚の契約を交わしていたわけですから、マリアが身こもれば、姦淫の重罪を犯すこととなります。マリアは神の召しを受けて、どう応答したでしょうか。御使いのことばに、すなわち主のことばに応答しました。38節です。マリアは言った。「ご覧ください。私

は主のはしためです。どうぞ、あなたのおことばどおり、この身になりますように。」すると、御使いは彼女から去って行った。」と。

三、マリアの献身と私たち

マリアは、神が人として生まれられるための選びの器でした。御使いガブリエルがマリアに声をかけられたとき、マリアはヨセフと婚約していました。主の召しを受け入れることによって、どのような困難が待ち受けているかを予測できたと思います。しかし神は、道を開いてくださいました。ヨセフは、一旦はマリアと離縁しようとしたものの、御使いによって神の壮大な御計画を知らされ、マリアを受け入れました。こうして主イエスは、ヨセフの子として、すなわちダビデの子として生まれられ、預言者イザヤが語った預言のとおりになりました。

神のみこころは、神の召しに応える人たちの応答によって進んでまいります。マリアに対する召しは特別なもので、私共に対する召しとはレベルがちがいます。そうではあっても、全能なる神は、私共に無意味に命を与えておられません。人生を与えておられません。私共にはそれぞれに使命があります。それを知って、小さな一歩を踏み出すなら、やがて「そういうことだったのか」と分かる日がやってまいります。